

## プリンス・マツダイラ物語

四年前、親類の家から古い写真が一枚見付かった。

「明治六年 新約克（ニューヨーク）にて

松平忠礼公 松平忠厚公 山口慎」

と書いてあり、写真館の古風なセットを背景に三人の若い男性が蝶ネクタイ姿で写っている。

松平忠礼は信州・上田藩五万三千石の最後の藩主で、忠厚はその弟である。山口慎（しづか）は私の父方の祖父で上田藩士だった。この写真で、九十年も昔に亡くなった祖父がアメリカに留学していたことを知って非常に驚いた。

十年前から私は自分のルーツを調べ始めた。私は父と八歳のとき死に別れたので何も聞けなかった。父の弟妹もみな他界し、いとこ達に聞いてようやくこの写真が出てきたのである。だが、留学については何も分からない。詳しく知りたいと思い、初めて長野県上田市を訪れた。まず上田市立博物館に行くと図らずも特別行事として三人の留学に関する展覧会の開催中であった。祖父の書簡も三通展示しており、館長さんも

「きつとお祖父さまのお引き合わせでしょう」

とこの偶然に驚かれたが、私はそこで恐らく日本人が誰も知らないであろう「明治のヒーロー」と出会ったのである。

弟の忠厚がアメリカで大成功をおさめ、偉大な足跡を印して「プリンス・マツダイラ」と呼ばれる名士になり、本にもなっていた。彼の数奇な運命に深く興味を抱き調べてみた。「江戸開府四百年」にちなみこれを纏める。

留学は、明治五年（1872）から七年間であった。

松平兄弟に祖父が「御修業御供」として随行した。兄弟は二十三歳と二十一歳、共に面長の貴公子だ。祖父は二十六歳、昌平齋を出て藩校で武士たちに学問を教えていた。写真で見ると雄偉な体格で腕っ節も強かったというから、ボディガードとしても適当だったのだろう。

松平忠厚は、嘉永四年（1851）十二代將軍・家慶の時代に生まれた。

三歳のときにペリーが来航し、十七歳で明治維新を迎

えたという時代背景である。外国に照らせば、エジソンとベルの四歳年下でゴッホの二歳年上に当たる。

十歳のとき分家の五千石の旗本に養子に入っている。十四歳で殿様となった。つとに頭脳明晰を知られ「弟君を上田藩主に」と願う臣下もいたという。

父の松平伊賀守忠固は、上田の小藩から二度に亘って「老中」となり、辣腕を振った優れものである。井伊直弼を大老に押し上げた陰の人物と言われている。兄弟の留学以前に長逝した。ついでだが、私の父は「固」（かたし）という名前で珍妙だなーとずっと思っていたが、忠固を尊敬していた祖父が主君の一字を頂戴して名付けたのだと、ここで納得した。

三人の留学先は「ラトガース大学」で、ニューヨークから南に50キロの所にある。ラトガースには日本人が多く留学し、当時の写真には十八人が「袴姿」で写っている。この中に祖父もいるはずだが顔がよく分からない。家には先祖の写真が沢山あったが、空襲ですべて焼けてしまった。戦争は貴重な「家の歴史」をも失わせたのだと改めて思った。

海を渡り陸路を走り、一カ月半かけてニューヨークに到着した三人は、まず三年間の大学進学コースに入りつぎの四年間を大学で学ぶ。

もちろん言葉や勉学の苦労はあつたろうが、兄弟にとつて堅苦しい「殿様暮らし」から一挙に開放的な生活となつて、ルンルン気分だったことは想像に難くない。まさか

兄は激怒した。養家に対しても面目マル潰れ。仕送りも絶たれて忠厚は困窮する。ここから兄弟の長い確執と、祖父の苦悩が始まるのである。

私は祖父について、留学の他に一つの解きたい謎を持つて上田に行った。

祖父は旧主君に殉じたといえる死を遂げている。それも大正の時代になってからの死である。この顛末は『高橋是清自伝』に詳しく書かれている。祖父はアメリカから帰国して「東京英語学校」の教師となり、同僚として是清と出会い生涯の親友となった。

是清の自伝を読んでも私にはよく分らなかつた。刀を置いてから四十年、なぜ祖父はお家のためにそれまでの人生を捨てたのか？

博物館で祖父から七代前までの歴史が分かり、郷土史家にも四、五人会って話を聞いて私は少し理解できたよくな気がした。侍として生まれた者にとつて、たとえ藩が消えようと主君は生涯主君であつたのだ。祖父の死は、その一線上にあつたのではなからうかと。今でも

「あの家は士族の出だ」

と言われる家は一目置かれていたようだった。東京なら隣に士族がいてもまるつきり分らない。これが由緒ある城下町の「郷土の誇り」というものかと、東京生まれで故郷を持たない私は驚いた。観光旅行では分からない発見だった。

毎日城趾を散策し、祖父が仰いだかもしれない老松に

兄弟の間に大変なトラブルが起きようとは、誰も想像しなかつたろう。

日本は維新前から、見聞を広めるため競って先進国へ進出し始めていた。ほとんどが武士である。多くは藩費だが松平家は私費で留学させている。三人は長崎へ出向いて、未知の「牛肉」を食べる練習をしたそうだ。

当時、約五千人がアメリカに留学しているが、三分の一は志なかばにして帰国した。何の知識も情報もない異国に飛びこんで、ズボンの前うしろさえ分らない。すべてに馴染めず孤独のなかで挫折する。しかしアメリカは「日本人の知性と勉学への情熱」を高く評価したという。

兄弟は、無事に大学理学部の全学科を終了し「学士号」を取得して、七年間の留学を終えた。忠厚は非常に成績優秀で人望も篤く、ラトガースで生徒会長を務めていた。祖父は藩命で一足先に帰国している。東京の曾祖父が死したからであろう。

兄弟がいよいよ帰国することになったとき、事件が起きる。

忠厚が突然、兄の前から「遁走」した。ランナウェイである。理由は、学間を続けたかつた事と、アメリカ人の恋人ができたからだというが、私は後者がゼツタイ大きいとらんでいる。ハンサムだし恋人がいてもおかしくないが、現代人も顔負けの翔んでるトノサマだ。

手を触れて祖父の心根を慮ったとき、その情熱が私に伝わってくるように思えた。この城で羽包まれた武士道精神は、何ものにも換え難かつたのであろう。それまで私の視野になかつた「武士」というものが、急に身近に感じられた。

閑話休題。祖父は忠厚の純粋な人となりを愛していた。「自分が付いていれば——」という思いもあつたろう。苦悩は深かつた。

忠厚は祖父にだけ手紙を寄越した。忠礼は忠厚が養子先から離縁されても、元の戸籍には入れぬと拒絶したので、祖父は兄に謝罪して即刻帰国するよう進言する。それが博物館に展示されていた書簡である。

「尊公には絶えて阿兄（お兄さん）へ御通信もこれ無き様子、何卒早く御調和の道相立ち候様、あらまほしく祈願に堪えず存じ奉り候」

「必ず二月中に御帰朝を指折りかぞへてお待ちする。これより他念なし。御発艦の日時、御報知あらんことを千祈万禱し奉り候」

千祈万禱とはすごい言葉で広辞苑にもない。祖父はいぶんホットな人だったらしい。「お帰りあれ！」という悲痛な叫びが文面から聞こえて来るようだった。お金の事もこまごまと書いている。

「御依頼の金子、漸くの事にて本日御廻金申し上げ候事に相成り候。銀貨四十弗相求め、金貨三十五弗も相もと

め、此度御廻し申上候也」  
「五十圓廻金は間に合ひ兼ね候。色々心配致し候共埒明  
かず、お気の毒に存じ奉り候」

だが忠厚はすぐに十九歳の恋人カリーと結婚してしま  
う。プロンドの美人だ。あ、モノクロ写真だから色は分  
からないが、きつとそうだ。

折しもアメリカは、駅馬車時代が終つて「鉄道開発ブー  
ム」に沸き返っていた。ロックフェラーやカーネギーも  
この時代に事業を興している。忠厚は働きながら更に土  
木工学を学び「マンハッタン高架鉄道」に就職した。こ  
こから彼の鬼才が爆発するように発揮されたのである。

十二カ国語を話したという頭脳抜群の彼は、ことに数  
学において天才であった。手先も器用で、あつという間  
に「測量・土木機器」をたくさん発明した。

画期的なのは、非常に複雑で長時間の計算が必要だつ  
た測量をわずか20秒でしかも正確に計る器具だ。運ぶの  
に便利な軽量機器も多数考案した。発明記録の第一番に  
「エンピツコンパス」というのがあり、これがもし小学  
校から使っているあのコンパスだとしたら、これだけで  
も大発明だろう。

惜しむらくは、これらの発明品の「特許」を取らなかつ  
たため、すぐに他社に真似された。殿様らしい大らかさ  
か、高名なわりに経済的にはさほど恵まれなかった。金  
銭欲も名誉欲もなかったという生き方はまことに優雅だ

も完成させ、過去になかった「三角測量」を編み出した  
という。

「日本観は完全にくつがえされた。現代日本を見直さね  
ばならない」

と数学者からも絶賛される。

「国際数学競技会」では、ゴールドメダルと五千ドルの  
賞金を獲得した。

名士となった彼はインディアン襲撃の危険を冒して  
大陸を横断し西海岸まで足を延ばしている。「今日は何  
処で何の仕事をしている」と彼の行動は逐一報道され、  
子供の成長ぶりまでニュースになった。

このサクセスは祖父にとって無上の喜びであつたらう。  
「これで故郷に錦を飾れる」

忠厚は帰国を切望した。が、遂に許されることはなかつ  
た。

彼は長男にタロウと名付けている。上田城で暮らした  
少年のころ、毎日眺めていた「太郎山」からとつた名で  
ある。自ら選んだ道だが、ふるさとの山々も悠々たる千  
曲川の流れも、彼の脳裡から消えることはなかったらう。  
だがここで驚くべき事実を知り、私の感傷は吹っ飛ん  
だ。何度も見た沢山の松平家の資料の隅っこに発見した。  
忠厚は何と、養子先ですでに妻を娶り、生まれて直ぐ死  
んだが赤ん坊までいたのだ。たつた一行半のこの記述に  
私は声をあげた。これはちよつと優雅とは言いがらう。  
祖父の懸命の「御仲裁」が成功しなかったのも、むべな

が「マツダイラコンパス」などと言うものがいま世界中  
で使われていたらと、優雅でない私はつい思つてしまつ  
た。

忠厚は特に、狭隘な地や曲りくねった地形の測量に抜  
群の手腕を見せた。馬に乗って山野を駆け巡り、僻地に  
もレールがひかれ橋梁が架けられていった。

ニューヨーク・タイムズをはじめ全米の新聞はこぞつて

「天才現わる。日本人を見直した。アメリカは敗れた」

「エジソンに匹敵する日本人発明家」

「流暢な英語を話す日本の発明家プリンス 礼儀正しく  
謙虚、華麗」

「不可能を可能にした日本人、プリンス・マツダイラ」

などと書き立て絶讃の嵐。その記事も並べられていた。  
「サムライの末裔」とも書かれているが、彼自身が侍で  
ある。

かくして日本の若きプリンスは、日ならずして華々し  
く全米にデビューした。日本は「知られざる小国」で刀  
を振りまわし野蛮とも思われていた時代、プリンス・マ  
ツダイラのエレガンスと才能はアメリカ人を大いに驚か  
せ、注目の的となったのであろう。

現在も日に十二万人を渡らせているブルックリン・ブ  
リッジは、忠厚がチーフ・エンジニアとして最初に手が  
けた作品である。モダンな「マツダイラ・ハウス」も残  
されている。「空間の軌跡」という三部からなる数学書

るかなである。

上田博物館で多数の展示品を見て、彼のたぐい稀な才  
能に深い感銘を受けた。極細の毛筆で描かれた設計図は、  
まことに繊細美麗で名画を見る思いだった。アメリカで  
言われていたようにまさに「アートの世界」である。刺  
繡用の絵のデザインなども沢山ある。それらには現代に  
通じる感性があつた。

明治二十一年（1888）、忠厚は三十七歳にして急  
逝した。

多忙な仕事と研究が身体を傷めていた。いまはコロラ  
ドのロッキーマウンテンの、みどり濃いデンバーの丘で永遠の  
眠りについている。祖父が再びサンフランシスコに上陸  
したのは、忠厚が没した翌年であつた。一冊だけ残る祖  
父の日記に挽歌が記されていた。

「松平忠厚公の霊を弔ひ奉る」

あめりかや港の関は閉ざさねど わが想ふ人の帰る

日はなし」

港はこんなに広く開かれてはいるのに、公は永遠に還ら  
ないという痛恨の歌である。

天皇皇后両陛下は、訪米の際ラトガース大学の学長に  
会い明治の日本人留学生を多数受け入れた事への謝辞を  
述べ、忠厚の四世であるハルとも会われた。ハルはいま、  
日本の忠礼の子孫と交流している。兄弟の「御調和」は、  
世紀を超えて果たされたのであつた。

忠厚の「没後百年祭」に、新たに立派な記念碑が建立された。碑は太平洋のかなた、遙かなる祖国日本へ向け、て建てられているという。

松平家の美しい家紋「五三の桐」を高く掲げて、碑銘は英文でこう刻まれている。

「タダアツ マツダイラ

最後の 上田藩主の弟 コロラドに住んだ最初の日本人」

#### 【長部日出雄】

素材の面白さは、今回の候補作中随一で、日本人がだれも知らない「明治のヒーロー」に遭遇するまでの経緯の興趣も拔群だが、文章の練りが足りない。このままでは惜しいので、よりいっそうの推敲が望まれる。

#### 【高田 宏】

親類の家から見つかった古い写真は、明治六年、ニューヨークで撮られたもの。写真の三人の青年の一人が、父方の祖父だった。この祖父と彼が随行した殿様のその後が探り出されている。プリンス・マツダイラと呼ばれた青年の奔放で数奇な生涯が興味ぶかい。